

工藤直子作品から広がる詩の指導

—作品集を読むという読書行為を通して—

Provide directions for poetic skills amplifying from the Naoko Kudo's work.

—Through the act of reading her collections of works—

長谷川 栄子・松田 智子

Eiko HASEGAWA Tomoko Matsuda

要旨 (Abstract)

教科書に取り上げられている詩教材の指導として、音読、情景を読む、詩から学んだ表現技法を用いて書くなどがよく行われている。このような指導方法からより多様な指導方法への視点を得て、主体的・対話的に他者や自分、詩と対話しながら学ぶことができるよう国語科における授業を創造したい。

そこで、工藤直子の詩の作品集を丸ごと味わう読書行為を子どもたちに経験させる授業実践を通して、どのような効果が生まれたのかを分析した。すると、①作品世界に浸り、詩人について思いを馳せるようになる、②多様な音声表現や多様な作品集の創作を楽しむ、③自己を見つめる契機となるなどの子どもたちの姿が見て取れ、作品集を丸ごと味わう読書行為は、効果的な詩の指導方法であると考えられる。実践を展開するにあたっては、朝の読書タイム等を活用して詩の作品集と出合わせる工夫や詩の教材についても多様な言語活動ができるよう系統的に国語科カリキュラムを作成する工夫が求められる。

キーワード：(工藤直子) (詩の指導方法) (作品集を読む読書行為) (多様な言語活動)

I. はじめに

詩の教材は、全学年の教科書に掲載されているが、学習指導要領では、重点的に取り扱う学年が次のように示されている。平成29年版小学校及び中学校の学習指導要領 国語科における詩の指導について位置付けを確認すると、B 書くことの言語活動例として、次のように挙げられている。

小学校			中学校
第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	第1学年
ウ 簡単な物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	ウ 詩や物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	イ 短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。	ウ 詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動。

C 読むことの言語活動例としては、次の通りである。

【小学校】

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
イ 読み聞かせを聞いたり物語などを讀んだりして、内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする活動。	イ 詩や物語などを讀み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	イ 詩や物語、伝記などを讀み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。

【中学校】

第1学年	第2学年	第3学年
イ 小説や随筆などを讀み、考えたことなどを記録したり伝え合ったりする活動。	イ 詩歌や小説などを讀み、引用して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。	イ 詩歌や小説などを讀み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

そして、上記の言語活動において、知識及び技能における(1)言葉の特徴や使い方に関する事項の内容の語彙や表現の技法、音読、朗読が組み込まれて指導されることになる。

詩を教材にする単元は、小単元で配当時間数が少ないので、教科書に掲載されている詩を音読したり、読んで感想を伝え合ったりして学習を終えてしまいがちになる。指導することに迫られている教員が、詩で遊ぶ、詩を面白がることができているのではないだろうか。楽しみ方の多様性に気付かず、多様な読書行為を子どもたちに体験させてくることが、詩の指導法についての課題である。また、全学年の教科書に掲載されていても知識及び技能における(1)言葉の特徴や使い方に関する事項の内容の語彙や表現の技法、音読、朗読するなどについて系統的に学校として整理されておらず、学年の教員任せになっていることも見られる。

Ⅱ. 作品集を読む読書行為からの広がり

このような詩の指導の実態を踏まえて、井上(2001)は、工藤直子の詩集全体から教材及び指導の方法を新たに開発しようと試みた。実践者と共に展開した授業の単元名と言語活動を列挙する。

①野原の「なかま」になってうたう 第1学年

自分の好きな詩を見つけ、暗唱する。発想や視点、リズムや言葉のおもしろさを見つけ、詩を書く。

②詩の季節を楽しもう 第2学年

詩を季節のテーマで編み、編集する力をつける。季節語彙を理解し、詩を書く。

③上手の自然を詩の遠足で伝えよう 第3学年

詩の技法や詩文と絵の関係を生かした詩集絵本を作る。自分の思いが伝わるように朗読する。

④新しいでんせつ詩集を創ろう 第4学年

原作の表現構造を踏まえて、詩を書く。自分の詩を暗唱する詩の交流発表会を開く。

⑤呼びかけの詩—自然のなかまに呼びかけよう 第4学年

対話形式の詩を書き、群読発表会を行う。

⑥詩の絵手紙を出そう 第5学年

詩の絵手紙を書き交換する。詩の朗読発表会を開く。

⑦自分を表出する新たな朗読法をさぐる 第6学年

好きな詩を選んで、詩画集を作る。詩のプロレス大会を開き、聞き手を惹きつける印象深い朗読をする。

⑧わたしが見たいのちは—私家版を編む 第6学年

観点を設定して詩を選び出し、アンソロジーを編む。朗読発表会を行う。

⑨ぼくの『のはらうた』を作って楽しもう 難聴学級

音読する。オノマトペを使って詩を書く。自分の詩集を作る。

⑩自分発見のためのアンソロジー 中学校第2学年

自分で決めた観点を基にアンソロジーを編集する。朗読発表会を行う。

⑪自分を作ったもの—一年譜作りを手がかりに 中学校第3学年

詩とエッセイを関連付けて読む。自分史年表に印象深い出来事や思いを詩とエッセイで表現する子どもたちは、どの単元においても工藤直子作品を多読している。多読し、音読や朗読する学習過程の中で工藤直子という詩人について発見をしていることだろう。これらの実践は、工藤直子の詩が教科書に掲載されている学年にかかわらず、どの学年でも指導できることを示している。工藤直子の詩を複数学年で取り上げるとき、違った視点から迫る読書行為を体験させることができ、子どもが読書行為の多様性に気づき学ぶことになる。

また、他の詩人の詩を教材にするときの指導についても応用できるだろう。これらの実践は、どのように学ぶか、学び方を学ぶという視点からも示唆を与えている。

さらに、他者や作品集との対話によって、自分自身を見つめる契機となっている。一つの詩の内容理解にとどまることのない広がりを見せている。

Ⅲ. 作品集を丸ごと味わう読書行為

次に、筆者が授業実践を行った授業アイデア⑤について、具体的に次に述べる。

子どもたちは、詩に出会うと、つかの間、現実世界から離れ、豊かな自然、ゆったりとした時間の流れ、人の心の温かさを感じることができる。人工的な街に住み、家に帰っても時間に追われる子どもたち。自分の気持ちを伝えるのに遠慮してしまい、人とのつながりを深めにくい子どもたちに、人を包み込むような大きく奥深い詩の世界を味わわせることは、自己の内面を見つめたり、身近な自然を発見したり、心の遊びを促したりする契機となるであろう。

自ら学習する楽しさを感じ始めた子どもたちに自覚的に詩の世界を味わえるようにと願って、本稿では、学習活動を通して、同一詩人の作品を多読する能力、自然の仲間になって詩作する能力、相手に伝えようとする音読の能力を育成する授業実践を提案する。

(1) 単元の構想

①単元名 自然のなかまに呼びかけよう

②教材

i 共通詩集・・・ ii に挙げた詩集の中から呼びかける詩を編んだ詩集

ii 選択読書工藤直子詩集・・・『てつがくのライオン』理論社(1982)、『ともだちは緑のにおい』理論社

(1988)、『あ・い・た・く・て』大日本図書(1991)、『くどうなおこ詩集〇』童話屋(1996)、『のはらうた

I・II・III』童話屋(1984)(1985)(1987)、『版画のはらうたI・II』童話屋(1992)(1996)、『ふくろうめが

ね』童話屋(1994)、『ゴリラはごりら』童話屋(1992)、『うたにあわせて あいうえお』岩崎書店(1996)、

『こどものころにみた空は』童話屋(1997)

iii 音読教材

『波瀬満子のしゃべる詩・あそぶ詩・きこえる詩』CD fontec、『のはらうた I』CD peeman's farm

③単元観

児童は、朝の会での詩の音読に継続的に取り組んできた。人前で話すことが苦手な児童が多かったので、緊張をほぐし、発声練習の意味を兼ねて行ってきた。子どもたちは、いろいろな詩人の作品に出会い、言葉遊び詩、季節感のある詩、心の動きが感じられる詩、それぞれの持ち味を感じている。

詩作については、「春をみつけよう」で観察した生き物になって詩を書く学習を行った。工藤直子の『のはらうた』を紹介し、人物を設定して詩を書いた。「どのようにして書くの。」から出発した児童であったが、生き物そのものの様子、季節、生き物の気持ちなどを表す詩を書いた。それを音読して紹介し、掲示された詩を見て互いに楽しんだ。

個人で音読するだけでなく、班で音読したり、司会を立てて話し合ったりする学習活動を通して、互いにかかわりが見て取れた。人に気持ちや考えを伝えようとする、それに応えていくことの重要性を感じた。まだ緊張する児童もいるが、いろいろな学習発表を通して次第にほぐされてきている。

工藤直子を書いた詩は、『のはらうた』に代表されるように生き物たちが自然を謳歌しているものが多い。その詩の世界には、自然が少ない環境で育って児童にもすんなりと受け入れられる温かさや楽しさがあり、身の回りの動植物や自然に目を向けるきっかけになる素材である。

また、読んでみると、季節を楽しむ詩、呼びかけたり、応えたりしている詩、内面を見つめる詩、言葉のリズムで楽しく遊んでいる詩などが見られる。本単元では、その中から、呼びかけたり、それに応えたりしている詩を初めて取り上げ、詩の世界を楽しむことにした。詩の学習の経験が少ない児童にとっても情景を想像しやすく、多人数での音読を楽しみ、詩の世界を味わうことができる教材であると考えた。

ともすると、単調になりがちな朝の詩の音読を活性化させ、児童の課題とも一致した学習単元を構想したいと考えた。工藤直子の詩集を多読することは、詩の世界を味わい、詩人を理解することになる。互いに呼びかけ、応える形態の詩があることに気付くだろう。物語だけでなく、詩の作品を手にとって読書する児童になってほしい。

詩作の際には、教室から飛び出して野外の雰囲気や少しでも感じながら、身近な自然に目を向けて書かせたい。対象を生き物から自然の風景へと自分の詩の世界を広げさせたい。また、呼びかける相手との距離を考えながら言葉を選ぶことによって、詩の中に立体感が生まれてくることだろう。呼びかける相手を設定して書くことで相手意識が生まれ、詩を互いにやり取りすることで心を通い合わせるだろう。個人で詩を書くだけでなく、班で書きまとめることもし、詩の登場人物としての仲間、クラスの仲間としてのつながりを感じさせたい。そのために、個人、班、クラスにおける学習活動形態を工夫していきたい。

詩がもつ立体感を醸し出すには、効果音を入れた群読が適切だと考えた。群読では、自分の責任を果たすことが意識され、クラスの友達と心をつなげて表現する楽しさを感じることができるだろう。群読発表会の企画、準備に意欲的に取り組み、目標をもった学習を遣り遂げるといった充実感を各自に味わわせたい。

(2) 単元の指導目標

- ①相手に呼びかけ、応えることのおもしろさを感じ、人とのつながりについて考えることができる。
- ②工藤直子詩集を多読し、対話形式の詩があることに気付くことができる。

- ③詩の言葉から自然の風景を豊かに想像して詩を読むことができる。
- ④自分と相手の関係に合った言葉を選んで詩を書くことができる。
- ⑤距離感や強調部分を声で表す工夫をして群読発表会を行うことができる。

(3) 単元の指導計画 (全16時間)

次	時	目標と評価	学習活動	指導上の留意点
一	1 2 3 4	1 対話形式の詩を音読する楽しさを味わうことができる。 2 一人の詩人の世界を味わい、対話形式の詩の様式を知る。 3 詩作と群読についての学習に意欲をもつことができる。	① 「くじらぐも」(光村図書1年)をくじらぐもと子どもたちに分かれて掛け合いながら音読をする。 (ワークシート1) ② 『のはらうたI』の「うみよ(よびかけの歌)」「わたぐもよ(おへんじのうた)」を海とわたぐもになってグループで工夫して音読する。 ③ 工藤直子の詩集を多読し、気に入った詩を視写する。[視写用紙] ④ 詩集の中から対話形式の詩を三色の付箋を貼って選び出し、分類する。 ⑤ 学習課題「自然のなかまに呼びかける詩を書いて、1年生に向けて群読発表会をしよう」を設定し、学習計画を協議する。 ⑤ 冊子の目次、構成、資料について話し合う。	○ 距離感が感じられるように3階と校庭に分かれて音読させる。 ○ 相手の気持ちに届けようと呼びかけたり、お返事させたりする。 ○ 視写した詩を掲示したり、朝の会で音読させたり、気に入ったところを発表したりして交流させる。 ○ 選び出した詩を共通詩集にしてまとめ、朝の会で音読させる。 ○ 学習計画表を書かせながら、学習の見通しをもたせる。
二	5 6 7 8	4 自然のなかまになって、風景を想像しながら詩を書くことができる。 5 詩の表現方法を知	⑥ 自然の仲間一覧を作り、登場人物を決める。 ⑦ 相手を決め、校庭で呼びかけの詩を書く。[詩作用紙] ⑧ 届いた詩に対してのお返事の詩を書く。 ⑨ 共通詩集を読み、表現方法を知って、詩作に生かす。	○ 生き物を取り巻く自然にも目を向けさせる。 ○ 登場人物の性格をとらえて書かせる。 ○ 複数の相手に詩を書き、やりとりを重ねさせる。 ○ 呼びかけの距離の違い

	9	って、詩作に生かすことができる。	⑩ グループで相手を決め、個人で呼びかける詩とお返事の詩を書く。	い、お尋ね、反復、比喩、体言止め、改行をおさえる。
	10		⑪ グループでまとめて、一つの呼びかけの詩、お返事の詩にまとめる。	○温かい気持ち、友達関係が感じられる言葉を選ばせる。
	11		⑫ ペア、グループ、クラス全員で群読する詩を選び、構成する。 (ワークシート2)	
三	12	6 距離感や強調部分を声で表すために人数を工夫して群読することができる。	⑬ 登場人物の気持ちや強調部分を考えて、群読練習をする。	○ 距離感や強調を表すために人数に変化をもたせる。
	13		⑭ 係(司会、挨拶、音楽、お知らせ、ポスター)を決め、仕事に取り掛かる。	○ 期日に向かって自主的に取り組ませる。
	14	7 友達と協力して係の仕事をし、群読発表会を意欲的に行うことができる。	⑮ 詩の始まりと終わりのタイミングをつかみながら、リハーサルをする。	○ 全体の流れが途切れないようにしのつなぎの間に気を付けさせる。
	15	8 学習のまとめをし、次への課題を見つけることができる。	⑯ 1年生から4年生に向けて、群読発表会を視聴覚室で行う。	○ 自分のめあてについて、振り返りながら書かせる。
	16		⑰ 群読発表会の自己評価や学習のまとめをする。	

(4) 授業の実際と考察

① 心を解放して

個の単元の前に学習した「芦屋の街は、ひとにやさしいだろうか。」における3年生へのパネルディスカッションで、しっかり声を出して、考えを相手に伝わるように話すことの難しさを感じ、津銀の学習の課題にしようとしている児童であった。今までの音読発表会では、登場人物の気持ちを考えて、声の大きさ、速さ、間に気を付けて読むことがほとんどであったので、相手意識も乏しく、教室内に響く声には、まだ遠いという状況から抜け出せていなかった。

そこで、思いっきりおなかから声を出させたいと思い、1年生で学習した「くじらぐも」を使って、くじらぐも役に校舎3階から1階ピロティにいる子どもたち役に向かって音読させた。1回では満足せず、「もっとやろう。」と張り切って役を交代して行った。その後、『のはらうたI』より「うみよ」「そらよ」の詩のプリントを配布し、海と空に分かれて同じように音読した。「寝転んで読むと、海の気分になれるよ。」「上から見ると、空の気分だ。」と言って、この音読も楽しんだ。

さらに、「それぞれのグループで、人数を変えて読んでごらん。」と指示すると、海のグループは、リーダーを決め、指揮者のように前に出て小グループにタイミングを指示して、行ごとに音読したり、全員で音読したりできた。「1年生で学習した時は、教室の中で読んだだけだったので、とてもおもしろかったです。」「気分が浸れて、大きな声を出せて楽しかったです。」という感想が、ほとんどを占めた。児童の気持ちを解放させて音

読ませたいという導入のねらいが、ほぼ達成されると共に児童のリーダー性を引き出すという収穫があった。

② 課題意識の芽生え

前時を受けて「外で大きな声で音読したい。」「工藤直子さんの詩をもっと読んでみたい。」という気持ちから意見を出し合い始めた。前単元で行った「芦屋の街は、人にやさしいだろうか」の3年生とのパネルディスカッションで、他学年との交流の充実感を得、少し自信をつけた児童は、今度はどの学年に聞いてもらいたいかを自分たちから提案するまでになっていった。1学期は、なかなか考えられなかった学習課題をこれまでの学習経験から発想できるようになってきた。前の学習の反省点を意識した「相手に伝わるようになるまで練習する。」「班でしっかり練習する。」といった発言が出る充実した話し合いになったことがよかった。

しかし、詩作の経験が少ないためか、苦手意識があることが分かり、新たにチャレンジしていくことになった。学習課題を協議した結果、「呼びかけの詩を書いて、1年生に向けて群読発表会をしよう」に決定し、学習計画を立てた。

③ 友達と詩を読む楽しさ

学級文庫、学校の図書室、芦屋市立図書館から工藤直子の詩集を集めても人数分には足りなかったので、1冊を2人で読む場合もあったが、これが結果的にクラスでの読書の雰囲気をつまみものにした。普段と違って、2人で読書することの楽しさを味わい、男女が楽しそうに小さな1冊の詩集を見つめている姿は、なんともほほえましく、楽しそうであった。詩集を読む楽しさが倍増され、新しい読書の楽しみ方を体験した。

家庭学習としても、順番に詩集を読み進め、好きな詩を視写したり、音読したりすることを通して交流した。読書が苦手な児童もすぐに読み切れてしまうこと、登場人物の楽しさに惹きつけられることから、進んで読み進めることができた。読んだ詩集のお気に入り度を表し、お気に入りの詩を視写することで選択読書を進めさせた。クラスのお気に入りの詩ベスト3は、「ゴリラはごりら」「地球は」「ふくろうのおねがい」となった。お気に入りの詩を朝の会で音読し、お気に入りの理由を発表した。Sさんは、「ぼくは、のんびり屋だから『のんびり』の雰囲気がとてもよくわかって、のんびりしたいと思います。」と発表し、笑いを誘った。児童は、工藤直子の詩集を多読して、読んでいて楽しい、明るい気分になると感じ、自然の生き物がたくさん登場する、詩の形式に違いがあることを見つけた。

そこで、「『そら』『うみ』のように呼びかけたり、応えたりする詩を見つけて付箋を貼ってみよう」と投げかけると、付箋を貼りたくて「私、もう見つけて知っている。」「これは、呼びかけている詩?」などと、口々に話しながら非常に意欲的に取り組んだ。呼びかけの詩の中にも、詩の中で二人が呼びかけている、相手に向かって呼びかけている、自分に呼びかけているといったことを見つけ、これらの項目に従って、児童が黒板に詩の題を書いて分類した。黒板の所で互いに意見を交流することが自然に行われた。

④ 身近な自然に目を向ける詩作

自然のなかまには、どんなものがあるかを出し合い、各自がなりたい人物を決めた。呼びかけたい相手を決め、校庭で詩を書くことにした。教室を出て学習するのは、とても好きである。そこで、一人になって詩を書くことという条件を出して書かせた。場所を選んで、地面に座り込んで書いている児童の姿を見ると、ゆったりした時の流れの中でじっくり考える場づくりを今後も行いたいと思った。呼びかけに応えたり、別の自然の仲間になってみたりすることで詩作を続けるうちに、書くことに慣れ、考え込んで書けないという子もいなくなった。2編書いた後、工藤直子の詩の表現方法から①反復、②比喩、③呼びかけの仕方、④改行を学び、次

作から生かして書くことにすると、次第に詩らしくなっていった。

何事にも正解を求め、きちんとしたものを目指そうとして、文章を書く時に進まないTさんは、次第に詩を書くことに慣れ、自分でも満足する詩を書くことができた。本校の校庭には、ナンキンハゼがたくさん植えられており、赤い葉を落とした後には、小さな白い実をたくさんつけて美しい。その様子を目に留め、書いたものである。身近な自然に目を向けられたことが嬉しい。他の児童の詩作にも影響を与え、書くことに慣れていった。

班による群読を行うためにも同じ登場人物になって個人で詩を書き、それを持ち寄って一つの詩に行うことを行った。一つの詩にまとめるときに注意したことは、各自のお薦めの言葉や気持ちを大切に構成する、温かい気持ちが表れている言葉を選ぶ、学習した表現方法を取り入れることであった。

伝えたい気持ちをもとに各自のお薦めの言葉をどう取り入れていくかが、話し合いの中心になった。互いの書いた詩を読み合った後、自分が班の詩に入れたい行を短冊カードに2枚書いて並べさせた。順序、つながり、表現方法、構成を考え、言葉を削り、書き加えていった。学習事項を総動員し絵の話し合いのため、難しかったが、司会を立て、どの人の言葉も取り入れるということで前向きに話し合いが進められた。言葉を選ぶという学習が、個人学習の時よりも焦点化され、推敲が必然的に行われ、思いがぶつかり合った話し合いとなったことが成果である。

⑤ 群読発表会に向けての自主的な姿勢

これまでの発表会体験から仕事分担もスムーズに進んだ。群読発表会の時間を昼休みにすることにしたため、本当に昼休みでもお客さんは来てくれるだろうかと児童は心配し、各教室へお知らせしたり、ポスターを書いて張ったりする仕事分担もでき、各自の仕事を丁寧に行おうと意欲的に取り組んだ。班練習から全体練習へ移ると、十分に練習していない班に対してアドバイスをしたり、互いに聞き合ったりして、励まし合いが発表当日に向けて活発に行われた。

また、移動教室で廊下を歩いている時や休憩時間などに一人が詩を大きな声で暗誦し始めると、その輪が広がっていく場面が見られ、児童は、声に出す楽しさを感じていた。

1回目の発表である参観日の当日は、想像以上に緊張したため、児童自身の考えた仕上がりではなかった。反省会では、「緊張に負けないで、しっかり大きな声を出す。」「聞き手を見る。」「覚える。」「始めを揃える。」などが、課題として出された。1年生に向けての発表までに、課題を意識した班練習と全体練習ができ、前回よりも児童のもっている力が発揮された発表ができた。1回目と2回目の発表の間における児童の成長に驚かされるとともに大変嬉しさを感じた。

ダウン症のYさんは、声に出しての音読は難しいが、自分の出番には、友達と一緒に立って役割を果たし、終わりの言葉おういう児童と共に恥ずかしながら、観客の前に立つことができた。責任を果たそうと自覚を持ち、友達と共に発表会を作り上げる喜びをどの児童もが、感じていることが伝わってきた。

発表会には、1年生だけでなく、宣伝の効果が表れ、3、4年生の参加もあり、3年生の児童からは、「自然の仲間の絵があつて、楽しかったです」「群読発表会ってどんな発表か分かりました。私もやってみたいです。」「詩のおもしろさを知らなかったけれど、少し分かりました。私も詩を書くのは、楽しいです。」「たくさん自然の仲間が出てきたけれど、地球や自然を大切にしたいと思います。」「一人で言う時、もっと気持ちを入れて頑張ってるね。」などの感想が寄せられた。

学級全体で振り返ると、「3年生から厳しい感想をもらったし、次はもっと気持ちも入れて読みたいです。」と次の課題を見つけた児童もいた。「一番難しかったのは、班で詩をまとめるときでした。でも、話し合いでうまくまとめた詩に満足しています。」「だんだん声が出るようになってうれしいです。」と学習に達成感があり、充実した気持ちでいっぱいになった。

(5) 終わりに

子どもたちは、工藤直子の詩と出会い、成長した。詩は、自ら学んでいくことを促してくれた。詩の音毒を通して自己解放が図られたのが契機となり、詩に共感でき、想像で遊べる空間があるのを実感して、自由に想像の翼を広げたからであろう。心を豊かにしてくれる世界が、そこにはあるのだ。自分の気持ちとぴったり合った言葉を選ぶ難しさを感じ、一つの言葉の重みを知ったという詩作の不自由さもある。友達と詩をやり取りし、心を一つにして群読しようと練習した過程において、他者との関係を育みながら自己を認識したに違いない。子どもたちは、自分の力を引き出し、発揮できる場を求めている。持てる力を最大限活用しての学習は、難しいが、チャレンジしがいのある学習であることも分かっている。自己の成長を感じられることは、だれにとっても嬉しいのだ。今後も、そのような学習を共に創り出し、充実感を分かち合えることを渡しの喜びとしていきたい。

IV. 詩の指導における工夫

一人の詩人の作品集を丸ごと読む読書行為から、多様な詩の指導法が展開された。授業実践を分析し、詩の指導における工夫点を整理し、今後の授業実践の参考とする。

(1) 子どもたちが、作品集を自ら読み進めるための工夫

学級に作品集を置いて子どもたちが自由に読むことができるよう環境を整える。そして、作品集を丸ごと味わうには、読書の時間の確保が必要である。そのために、朝の読書タイムなどを活用したい。

次に、作品集の読書リストを作って、読み終える充実感を見えるようにする。子どもたちが選んだ好きな詩ごとに感想を掲示し、読み合っただけで交流できるようにするなど、次々に読んでみたくなるような仕掛けが必要だ。そうすれば、隙間の時間にも作品集を手取る子どもたちが増えてくる。

さらに、詩を読んだ感想の違いや気づいた面白さの違いを交流する場の設定は、再読を促したり、未読の詩を読む契機となり、主体的な学びを生む。

(2) 年間指導計画の作成時における工夫

教科書では、各学年に詩教材が掲載されている。一方で学習指導要領では、重点的に詩を扱う学年が提示されている。そこで、児童の実態を踏まえ、知識及び技能における(1)言葉の特徴や使い方に関する事項の内容の語彙や表現の技法、音読、朗読するなどについて指導内容を系統的に位置づけた年間指導計画の作成が求められる。物語の音読や朗読と関連付ければ、指導内容が豊富になり、それらの能力の高まりを実感できるようになる。

次に、工夫したい点は、どのような言語活動を行い、どのような学習を最終ゴールに設定するのかである。小学校6年間、中学校3年間を見通したときの言語活動における指導内容の系統性と、最終ゴールの多様性を求めたい。その決定の際には、次のような点を考慮することになる。どのような詩人のどの詩を契機にして作品集と出合わせるのか。一人の詩人の詩を複数学年で取り上げて学習するのかどうか。複数学年で取り上げると決めた場合、視点を変えてどのように学ぶのか。

さらに、授業時数の決定がある。まとまった授業時数を確保して単元構成をしたいとき、その授業時数をどの

ように生み出すのか。その場合、季節ごとに学習したり、帯の時間帯を活用したりすることも考えられる。

(3) 教材研究を楽しむ

子どもたちに作品集を手渡す前に、是非時間を作って、教員自身も丸ごと作品集を味わう楽しさを感じてもらいたい。詩を書く言語活動を行うのであれば、教員も詩を書き、子どもたちが難しさを感じる点は何なのか、楽しさはどのようにして生まれるのか、指導の前に体感し、理解しておきたい。そうすれば、教員が、子どもと共に学びを楽しみながら、個に応じた指導が実現できるに違いない。

【参考文献】

小学校学習指導要領、文部科学省（平成 29）

小学校学習指導要領解説 国語編、文部科学省（平成 29）

『●工藤直子実践集 くどうなおこと子どもたち 詩人の生き方・子どもの読み方』井上一郎編著(2001)
明治図書